

## カムチベット語香格里拉県浪都[Lamdo] 方言の方言所属

著者	鈴木 博之
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	35
号	1
ページ	233-266
発行年	2010-11-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003898">http://doi.org/10.15021/00003898</a>

## カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属

鈴木博之\*

### Dialectal position of Lamdo [Langdu] Tibetan spoken in Shangri-La County

Hiroyuki Suzuki

本稿では、中国雲南省迪慶藏族自治州北東部に位置し、四川省甘孜藏族自治州稻城県と接する格咱郷浪都村において話されるカムチベット語 Lamdo 方言について、その音声分析を行い、それに基づいて同方言のカムチベット語における方言所属を議論する。

浪都村は格咱郷のその他の村よりも隣接する稻城県側の村に近い位置にある。格咱郷中央部のチベット語方言は、Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群に属するものであるが、浪都村に隣接する稻城県側の方言は Muli-nDappa 方言群 sTongnyi 下位方言群に属し、所属が全く異なる。Lamdo 方言はこれまで未記述であったため、議論されたことがない。本稿で方言所属を特に議論するのは、このような背景があるからである。

方言所属を議論するに当たり、Lamdo 方言の周辺に分布する Sems-kyi-nyila 方言群、Chaphreng 方言群、Muli-nDappa 方言群から選んだ方言を比較の対象とする。具体的に比較する言語現象は2点あり、1つはチベット文語形式と口語形式との対応関係で、もう1つは語彙形式である。これらの分析を通して、Lamdo 方言の方言所属を考察する。

考察の結果、音対応において Lamdo 方言は Sems-kyi-nyila 方言群と Muli-nDappa 方言群の双方の特徴を共有している一方、語彙形式において Sems-kyi-nyila 方言群にやや近い特徴を見せていることが判明した。これに基づき、Lamdo 方言が Sems-kyi-nyila 方言群に属するという結論に達した。

---

\* 国立民族学博物館外来研究員

**Key Words** : Tibetan, Diqing Prefecture, phonetics, dialectology, dialect classification  
キーワード : チベット語, 迪慶州, 音声学, 方言学, 方言分類

This paper explores the dialectal position of Lamdo Tibetan, a Tibetan dialect spoken in Langdu sub-village on the north eastern edge of Geza village, Xianggelila County, Diqing Tibetan Autonomous Prefecture, Yunnan, China. This small village is located closer to Daocheng County of Sichuan than any other sub-village of Geza, and the Tibetan dialects of Daocheng and Geza belong to different groups, the former to nDappa, the latter to Sems-kyi-nyila.

This paper aims to clarify the dialectal position of the Lamdo dialect of Khams Tibetan using a comparative method involving both comparison of sound correspondences between spoken forms and Written Tibetan (WrT) in multiple Tibetan dialects, and also word forms. In consideration of the geographical situation, the scope of the dialectal comparison covers the dialects spoken around Langdu village, which can be divided into three main groups: Sems-kyi-nyila, gTorwarong and nDappa.

The analysis shows that the Lamdo dialect genetically belongs to the Sems-kyi-nyila group, because its lexical features are closer to the Sems-kyi-nyila group, despite its sharing the features of the three dialectal groups on the point of sound correspondences with WrT.

1 はじめに	3 Lamdo 方言における藏文と口語形式の対応関係
1.1 迪慶州のチベット語方言	3.1 初頭子音
1.2 Lamdo 方言をめぐって	3.2 母音および母音+末子音
1.3 本稿の構成	4 Lamdo 方言の方言所属：方言比較を通じて
2 Lamdo 方言の音声分析	4.1 藏文対応形式に関する比較
2.1 音体系の素描	4.2 語彙項目に関する対照
2.2 超分節音	4.3 結論：Lamdo 方言の系統
2.3 母音	5 まとめ
2.4 子音	

## 1 はじめに

### 1.1 迪慶州のチベット語方言

雲南省北西部の一角、迪慶 [bDe-chen] 藏族自治州はチベット語がまとまって分布する地域の南東端に当たる。同地域に分布するチベット語がカムチベット語の変種であることは共通認識であるが、先行研究を整理すると、その下位区分に関して主張が分かれていた（瞿靄堂・金效静 (1981), 張濟川 (1993), Zhang (1996), 格桑居冕・格桑央京 (2002) など）。そこで筆者は現地調査を通して方言資料を収集し、それを用いて主に音声・音韻の特徴の観点から、新たな方言分類を試みた（鈴木 2008b, 2009a, 2009d）。迪慶州のカムチベット語の下位分類は、現段階において次のようになる（所属方言例の [] 内は漢語名）。

方言区分	下位方言区分	所属方言例（迪慶州に限る）
Sems-kyi-nyila 香格里拉	rGyalthang	rGyalthang [建塘], Yangthang [小中甸]
	雲嶺山脈東部	Nyishe [尼西], Thoteng [拖頂], Byagzhol [霞若], Qidzong [其宗]
	Melung	Melung [維西], mThachu [塔城], Zhollam [勺洛]
sDerong-nJol 得榮德欽	雲嶺山脈西部	Foshan [佛山], nJol [德欽], Yungling [雲嶺], Yanmen [燕門], Budy [巴迪]
	sPomtserag	sPomtserag [奔子欄]
	gYagrwa	gYagrwa [羊拉]
Chaphreng 郷城	gTorwarong	gTorwarong [東旺]

以上の方言区分は、口語形式とチベット文語形式（以下「藏文」）の対応関係に基づいて行なわれている。各種地点の方言資料の音声分析を通して得られた結果から、特定の音対応を示すものをグループに分け、それに語彙形式などの特徴を加味することで分類が成立する。しかしこの種の分類方法は、迪慶州のすべてのチベット語方言分布地点を網羅していないため、新たな方言を調査するたびに常に改訂を要し、拡張や場合によっては修正が要求される性格のものである。この種の分類では、言語地図を描く際にそれぞれの方言群を区分する線を容易に理解できるように地図上に書き入れ

ることが難しい。

本稿で扱う Lamdo (浪都) 方言は、まさに方言分類の上で大きな問題を抱えている。分布地域が言わば飛び地であり、分類の指標となりうる音対応における特徴がこれまでに知られている迪慶州のカムチベット語のいずれともうまく一致しないからである。

## 1.2 Lamdo 方言をめぐって

Lamdo 方言は迪慶州香格里拉 [Sems kyi Nyi-zla] 県の北東部に位置する格咱 [sKad-drag] 郷浪都 [La-mdo] 村で話される方言である。浪都村の東端にある村 (義瓦 [Yul-ba] 村) から東へ数キロ行くと四川省稻城 [Dab-pa] 県に入り、香格里拉県のいずれの村よりも稻城県の方が距離的に近く、また人的交流も多い。その一方、行政区分において浪都村は迪慶州であり香格里拉県に属するため、交通路は格咱郷郷政府を経由して香格里拉県县城 (建塘 [rGyal-thang] 鎮) へ通じる道もまた整備されている。しかし浪都村～格咱郷郷政府間にはほとんどチベット人の村がなく、海拔 4,960 メートルの山を隔てて分断されているといえる。浪都村出身者の中には、自身の出身地を隣接する稻城県の地名である「東義 [sTong-gnyi]」を用いる人もいる。また、呉光范 (2009:319) の記載によると、村民は 523 人で、みなチベット族である (統計資料の出典は不明)。この数には周辺地域から結婚などによって最近移住してきた人も含まれると考えられるが、Lamdo 方言話者の概数と見積もっても差し支えないだろう。

Lamdo 方言の調査に関しては、筆者は建塘鎮において浪都村出身者の友人の紹介を受け、その人の実家である浪都村の中の義瓦村を実際に訪れて行なった。基礎語彙の収集を中心に、稻城県側の周辺村 (各卡 [dKar-cha] 郷及び吉呷 [rGyal-dga'] 郷) も訪れて方言差異も調べることができた。また、これらの地域ではチベット語の伝承がきわめてよく保持され、また地域的に見て他のチベット語方言や漢語の干渉も少ないようである。ただし人名は例外的で、村民の大部分がチベット名とともに漢名を持ち、日常生活では漢名を使用することが多い。

以上のような状況にある Lamdo 方言が方言所属上の問題になるのは、香格里拉県に分布する方言群と稻城県に分布するそれとは異なっていることと関連する。四川省西部を中心に分布するチベット語方言の分布と分類を扱う鈴木 (2009c) と Suzuki (2009a) によれば、稻城県のチベット語はカムチベット語の Muli-nDappa (木里稻城) 方言群に分類され、Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群と異なるものとされる。また、東義地区で話される方言は前者の中の下位方言群を形成することになっている。すなわち、浪都村はこれら 2 つの方言群の分布地域の境界になるかもしれない地域に位置している

のであり、そこで話される Lamdo 方言がいずれの方言群に所属するかは方言の系統の面でも方言区画の面でも興味のある問題になる。仮に Lamdo 方言が双方の方言群の特徴を備えている場合、「混合語」ならぬ「混合方言」ということも十分にありうることになる。しかし言語や方言の系統を考えるときには、もともと「混合したもの」を起源に認めるのは奇妙で、西田 (2000:85) は次のように述べている。

理屈からいくと、言語の系統というからには、混合とはいっても、もとをたどればどちらか一つが基盤であったと考えるべきであるから、実際には混合した起源をもつ言語は存在しないといえる。

これは方言分類にもそのまま当てはまることであり、混合しているように見える特徴を評価する作業が必要であることを示唆する。すなわち、さまざまな対応関係を示すものの中から基盤をなす特徴を見出して、それを基礎に系統的な問題を検討する必要性がある。

なお、筆者は本稿に先立って、Lamdo 方言に見られる特徴的な音声現象を音声学的観点から取り上げて議論した (鈴木 2010a)。これを除き、Lamdo 方言の言語学的記述研究はないと見られる。

### 1.3 本稿の構成

本稿では、まず Lamdo 方言の音声分析を通して音体系の全体像を見る (2 節)。次に、得られた口語形式と蔵文との対応関係について、瞿靄堂・金效静 (1981) や西 (1986) など多くの先行研究にならって、方言分類に大きく関わる点を明らかにしていく (3 節)。その後、その対応関係を迪慶州や稲城県のチベット語諸方言の事例と対比することを通じて Lamdo 方言の方言所属を議論する (4 節)。

なお、本稿で用いる音表記では、国際音声字母 (IPA) で規定されるもののほか、中国で慣用的に使用される音声記号も含めて用いている。音声分析の項で述べるが、表記の方法などの背景や詳細は鈴木 (2010a) を参照。

## 2 Lamdo 方言の音声分析

### 2.1 音体系の素描

まず Lamdo 方言の音体系全体について、超分節音、母音、子音、音節構造の順に紹介する。

超分節音

4 種の声調が認められ、それぞれ語単位にかかる。

ˉ : 高平                  ˊ : 上昇                  ˋ : 下降                  ˆ : 上昇下降

母音

長短および鼻母音/非鼻母音の対立が存在するものがある。

i                  u                  ɯ u  
 e                  ə ɐ                  ɤ ɔ  
 ɛ                  ɜ                  ɔ  
 a                  ɑ

子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	tʰ	t <sup>h</sup>	c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t	t̥	t̥	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̥	d̥	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tc <sup>h</sup>			
	無声無気		ts		tc			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʃ <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>			
	無声無気		s	ʃ	ç	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ		ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

## 音節構造

音節構造は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

${}^C C_1 GVC$  および  $CC_1 GVC$

このうち  $C_1$  (主子音) と  $V$  (音節核の母音) が必須である。

最初頭子音  ${}^C$  は前鼻音, 前気音の 2 種のみが現れる。わたり音  $G$  には  $w, j$  がある。よって最大の初頭子音の構造は 3 子音連続となる。前鼻音を含む音節についてののみ, その鼻音要素の発音の仕方から,  ${}^C C_1$  と  $CC_1$  に分けられ, 後者の方が鼻音要素の調音時間が長い。

末子音には  $ʔ, w, j; wʔ, jʔ$  がある。

## 2.2 超分節音

Lamdo 方言の超分節音は、ピッチの高低による対立で実現され, 高平調, 上昇調, 下降調, 上昇下降調の 4 種に分かれる。弁別的なのは現れるピッチの高さ (調値) ではなく, 平板か上昇もしくは下降などの型 (調類) である。声調は語単位でかかるが, 3 音節以上の語の場合, 第 1, 第 2 音節までで弁別的な声調の型を形成し, 第 3 音節以降は [22] 程度の高さで現れる。

以下に, 語の音節別の調値を 5 段階で表示した例をあげる。初頭子音の性質によって具体的な調値に若干の差異が生まれるが, 弁別的ではない。

	高平調	上昇調	下降調	上昇下降調
1 音節語	$\bar{n}\bar{a}$ [S <sup>55</sup> ] 「2」	$\acute{n}\bar{a}$ [S <sup>24</sup> ] 「人」	$\grave{n}iʔ$ [S <sup>53</sup> ] 「餌をやる」	$\hat{m}a$ [S <sup>132</sup> ] 「傷口」
2 音節語	$\bar{n}\bar{a} \bar{t}\bar{a}$ [S <sup>55</sup> S <sup>55</sup> ] 「物語」	$\acute{n}e: pa$ [S <sup>13</sup> S <sup>55</sup> ] 「病人」	$\grave{n}a: t\bar{a}$ [S <sup>55</sup> S <sup>53</sup> ] 「誓う」	$\hat{n}a k^h\bar{y}$ [S <sup>12</sup> S <sup>31</sup> ] 「みんな」

## 2.3 母音

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立しているため, 計 4 種の対立が認められる。ただし, 全ての舌位置に

ついで 4 種の対立が認められるわけではない。特に長鼻母音は出現に制限が見られ、また出現する頻度が相対的に低く、例によっては短鼻母音として発音しても許容される場合がある。

「短母音 + 声門閉鎖音 /ʔ/」の組み合わせは、語によって語中において長母音と交替することがある。

以下、非鼻母音と鼻母音に分けて、その長短の具体例を並列して掲げる。

### 2.3.1 非鼻母音

/x, ʒ/には対応する長母音が認められない。

	短母音例		長母音例
i	ʼni t <sup>h</sup> õ 子供		ˉni: nã 夢
e	ʼme lɣv あご		ʼne: 小麦
ɛ	ʼt <sup>h</sup> ɛ naʔ 痰		ʼs <sup>h</sup> ɛ: t <sup>h</sup> oʔ 東
a	ˉna dze: イヤリング		ʼna: 太陽
ɑ	ʼja ba 腕		ˉfi ma: nə 軍人
ɔ	ˉfi dɔ wa 心配する		ʼjo: s <sup>h</sup> a 未亡人
o	ˉno mɣ 鋭利な		ˉto: sõ 13
u	ʼnu ni ʼjeʔ シャッキリする		ˉfi bu: 魚くさい
ʊ	ʼju t <sup>h</sup> po 体		ʼsu: 端
ɤ	ˉnɣ mo とがった		
ə	ʼnə 人		ˉn dzə: tə 答え
ɜ	ˉzɜ ジャスパー		
ɯ	ʼtɯ ka ひよこ		ʼt <sup>h</sup> ɯ: tsõ 家畜
ø	ʼjeʔ 明るい		ʼts <sup>h</sup> ø: mã 野菜

### 2.3.2 鼻母音

/x, ʒ/には鼻母音が認められず、さらに/i, e, ɛ, ɔ, u, ʊ, ə, ɯ/には長鼻母音が認められない。

	短母音例		長母音例
i	ˉci 雲		
e	ˉfi gwõ t <sup>h</sup> tē 背		

ɛ	<sup>-h</sup> tɕɛ̃ kwā̃ sɛ̃	脇		
a	´wā̃	乳	´nā̃:	日にち
ɑ	´ʔə sū̃	最近	´pā̃:	霜
ɔ	<sup>-</sup> nã gwō̃	鼻の穴		
o	<sup>-h</sup> dō̃	顔	´pō̃:	娘
u	<sup>-</sup> ŋū̃ mba	狂人		
ɯ	<sup>-h</sup> gū̃ k <sup>h</sup> a	冬		
ɣ				
ə	´t̚ dzə̃	はさみ		
ɜ				
ɯ	<sup>-h</sup> t <sup>h</sup> ū̃ ba	肝臓		
ə	<sup>-h</sup> dē̃ mɣ	客	´s <sup>h</sup> ō̃:	種

## 2.4 子音

子音は、初頭単子音、初頭子音連続および末子音に分けて具体例を挙げつつ考察する。

### 2.4.1 初頭単子音

単子音の具体例は、可能な限り 2 例ずつ挙げる。

#### 閉鎖音・破擦音

Lamdo 方言は閉鎖音・破擦音に基本的に無声有気、無声無気、有声の 3 系列を有する。

特に、前部硬口蓋閉鎖音/<sup>h</sup>t, t, d/と硬口蓋閉鎖音/<sup>h</sup>c, c, ʃ/の対立は典型的にきわめて特徴的である。後者の調音位置は硬口蓋のやや後部になることが多い。

有声音については単子音として現れる例は相対的に少なく、しばしば語中に見られる。そり舌閉鎖音/<sup>h</sup>t, t, d/は現れる頻度が相対的に少なく、/<sup>h</sup>t/は 1 形態素のみに現れる。

	例語	語義	例語	語義
<sup>h</sup> p	<sup>-</sup> p <sup>h</sup> aʔ	ふた	ʼp <sup>h</sup> o mo	男女
p	´pa	めす牛	´po mɣ	娘
b	˘buʔ	空気	´ba dō̃	深い
<sup>h</sup> t	´t <sup>h</sup> ō̃ rə̃	森	<sup>-</sup> t <sup>h</sup> e:	縄
t	´t̚	ほら貝	´tɣ	2 つ

<b>d</b>	ḍē	7	ʼdeʔ	いる
<b>tʰ</b>	ṯʰə	1 万		
<b>t</b>	ʼta tsʰō	寺	ʼtʰaʔ	勝つ
<b>ɖ</b>	ʼtsʰə ɖaʔ	今すぐ		
<b>tʰ</b>	ṯʰa	ペア	ṯʰu:	お経
<b>ʃ</b>	ʼʃa	茶	ṯo: hʰtʃiʔ	11
<b>ɖ</b>	ʼbə ɖa	沈殿物		
<b>cʰ</b>	ṽcʰaʔ	血	ṽcʰə	ベッド
<b>c</b>	ʼcō tsʰoʔ	ひじ	ʼcə fiā dza ɖwoʔ	アリ
<b>ʃ</b>	ʼpə ʃe:	波	ʼzi ʃv	本
<b>kʰ</b>	ʼkʰō ba	家	ʼkʰə wa	雪
<b>k</b>	ʼkō rə	襟	ṯkə <sup>fi</sup> ɖv	くるみ
<b>g</b>	ʼgo: jū	服	ʼgu tsə	唐辛子
<b>ʔ</b>	ʼʔə ma	母	ʼʔa dzu	甕
<b>tsʰ</b>	ṽtsʰa	塩	ṽtsʰə	犬
<b>ts</b>	ṽtsa kʰa	背負いかご	ʼtsə ka	小さい
<b>dz</b>	ʼdza ko	靴	ʼdzoʔ	完成する
<b>tʃʰ</b>	ṽtʃʰū	暇な	ṽtʃʰuʔ	あなた
<b>tʃ</b>	ṽtʃa ʃʰiʔ	つるつるの	ʼtʃū rē	正午
<b>dz</b>	ṽdza	100	ṽdzeʔ	8

### 摩擦音

Lamdo 方言は摩擦音に有気，無気，有声の 3 系列を有する歯茎摩擦音，そり舌摩擦音，前部硬口蓋摩擦音と無声，有声の 2 系列を有する軟口蓋摩擦音，声門摩擦音，および硬口蓋摩擦音/ç/が認められる。

/x, ɣ/はきわめて少数の例にのみ現れ，/h, fi/は単子音として現れる例がきわめて少数に限られる。

	例語	語義	例語	語義
<b>sʰ</b>	ṽsʰa	土	ṽsʰō hʰtʃ	30
<b>s</b>	ʼsō	銅	ʼsuu:	端
<b>z</b>	ṽzō	やすり	ʼzə rə	柄杓

ʂ <sup>h</sup>	ˉʂ <sup>h</sup> a	肉	ˉʂ <sup>h</sup> ɪ	薪
ʂ	ˊʂo wa	帽子	ˊʂo: tsa	朝食
ʐ	ˊʐə	4	ˉʐē	なぞなぞ
ʑ <sup>h</sup>	ˉʑ <sup>h</sup> a: ma	箒	ˉʑ <sup>h</sup> ɪ ɲa	数珠
ʑ	ˉʑe pa	もの	ˆʑx <sup>h</sup> ɲ <sup>h</sup> ū	踊り
ʒ	ˊzo: tɕē	あぶみ	ˊzi jɣ	本
ʧ	ˉʧa	神	ˊʧəʔ ʧəʔ	ゆっくりの
x	ˉxa <sup>h</sup> ɬɣ	鬼		
ɣ	ˊnə ɣə	人		
h	ˋha ko	理解する	ˋhə zwoʔ	削る
fi	ˋ <sup>h</sup> i do: re ˋfiəʔ	蹴る	ˋʑe fiō	帰る

### 共鳴音

Lamdo 方言の共鳴音は硬口蓋鼻音/ɲ/と半母音/w, j/を除いて有声と無声の系列が存在する。

/ɲ/はきわめて少数の例にのみ現れる。前部硬口蓋鼻音/ɲ/と硬口蓋鼻音/ɲ/の対立は類型的にきわめてまれである。

	例語	語義	例語	語義
m	ˉmɣ	耕す	ˆma	傷口
m̥	ˉm̥ē	葉	ˉm̥iʔ	土台
n	ˉna <sup>h</sup> ɬɜ	耳	ˊnā	病気である
ɲ	ˉɲa	鼻	ˉɲaʔ	わな
ɲ̥	ˉɲə	火	ˉɲō	納西族
ɲ̥	ˉɲo wā	竹	ˉɲejʔ	沈殿物
ɲ	ˊɲū ca	すずめ	ˉɲo: pa	速い
ɲ	ˉɲa	5	ˊɲa	私
ɲ̥	ˉɲa tɕa	早い	ˋɲe: ʑ <sup>h</sup> o ru	おもての
l	ˉləʔ	肥えた	ˉla za	ラサ
l̥	ˉl̥ə: ʧa	学校		
r	ˊra	山羊	ˊrō rō	おのおの
r̥	ˋpe: r̥iʔ	壊れる	ˉɲu: fia ˉr̥eʔ	いびきをかく

j	ˈjɛ sʰɛ:	選ぶ	jō	もってくる
w	ˈwo	キス	ˈwa	狐

#### 2.4.2 初頭子音連続

Lamdo 方言に見られる子音連続の組み合わせ数は比較的多いが、その組み合わせのパターンは単純で、大きく前鼻音、前気音、わたり音を含むものに分けられる。前の2者とわたり音は独立して現れることができるから、最大で3子音連続を形成するが、その出現頻度は低い。

以下、まずわたり音を除く2子音連続について前鼻音と前気音に分類して例を挙げ、ついでわたり音を含む2子音連続、3子音連続と続けて例を挙げる。

#### 前鼻音

前鼻音には、鼻音部が後続子音より弱く発音される狭義の前鼻音と、後続子音より強く発音されるタイプのものがある。後者は朱曉農 (2007:10; 2010:146-147) で「後爆鼻音」と呼ばれるものに近いと考えられ、少数例にのみ見られるが、発話速度が早い場合鼻音のみの発音になるという特徴がある。このタイプは、狭義の前鼻音つきの子音連続をもつ語でも、音声学的に現れることがある。詳細は鈴木 (2010a:110-112) を参照。ただしこの現象は、鼻音の後続子音が脱落したのではなく、鼻音に同化したと分析できる。鼻音だけが聞こえる場合、その調音は単独の鼻音よりもやや長い。また、いくつかの狭義の前鼻音でも、発話速度が速い場合には聴覚印象に鼻音だけが際立つ。

有声音に先行するものと無声有気音に先行するものが認められ、前鼻音は子音連続間で調音位置と有声性が一致する。

鼻音部が後続子音より弱く発音されるタイプ

<sup>m</sup> b:	ˈ <sup>m</sup> bɜ	蚊
<sup>n</sup> d:	ˈ <sup>n</sup> du:	弾丸
<sup>ɳ</sup> d:	ˈ <sup>ɳ</sup> dɑ	似る
<sup>ɳ</sup> d:	ˈ <sup>ɳ</sup> də	これ
<sup>ɳ</sup> j:	ˈ <sup>ɳ</sup> je:	米
<sup>ɳ</sup> g:	ˈ <sup>ɳ</sup> go <sup>h</sup> kā	額
<sup>n</sup> dz:	ˈ <sup>n</sup> dzɰ	めすヤク
<sup>ɳ</sup> dz:	ˈ <sup>ɳ</sup> dza mɰ	泥

鈴木 カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属

$m^h p^h$  :  $m^h p^h e$  減らす  
 $n^h t^h$  :  $n^h t^h \tilde{o} mo$  高い  
 $\tilde{n}^h t^h$  :  $\tilde{n}^h t^h \tilde{e} \eta \tilde{o}$  違反する  
 $\tilde{n}^h t^h$  :  $\zeta \tilde{e} \tilde{n}^h t^h \tilde{a}$  踊る  
 $\tilde{n}^h c^h$  :  $\tilde{n}^h c^h \tilde{a}$  洗う  
 $\tilde{n}^h k^h$  :  $\tilde{n}^h k^h ar \eta a$  どら  
 $n^h ts^h$  :  $n^h ts^h \tilde{e}$  夜中  
 $\tilde{n}^h t^h c^h$  :  $\tilde{n}^h t^h c^h \tilde{a}$  遊ぶ

鼻音部が後続子音より強く発音されるタイプ

$mb$  :  $\tilde{m} \tilde{l} \tilde{o} mb \tilde{v} t^h \tilde{v}$  象  
 $nd$  :  $\tilde{n} da$  弓  
 $\eta d$  :  $\tilde{\eta} d \tilde{o}$  満腹になる  
 $\eta g$  :  $\tilde{\eta} \tilde{a} \eta ga$  影

### 前気音

有声音に先行するものと無声無気音に先行するものが認められ、また子音連続間で有聲性が一致する。

$h p$  :  $h p \tilde{o}$  平原  
 $h t$  :  $h ta$  へそ  
 $h t$  :  $\zeta \tilde{e} h t \tilde{u} ?$  固定する  
 $h t$  :  $h t a$  ta 自転車  
 $h c$  :  $h cu$  wa チーズ  
 $h k$  :  $h ku$  pa 糸  
 $h ts$  :  $h ts \tilde{o}$  wa 草  
 $h t c$  :  $h t c a$  k<sup>h</sup>  $\tilde{o}$  トイレ  
 $h s$  :  $h s \tilde{e}$  dz $\tilde{e}$  豆粉  
 $h l$  :  $\zeta p^h \tilde{e} \zeta h l \tilde{a} ?$  破壊する

- h<sub>s</sub>** : <sup>-h</sup>ʂu: 鯽  
**h<sub>c</sub>** : <sup>-h</sup>ʂa: zoʔ 下男  
**h<sub>ç</sub>** : <sup>-h</sup>ʂaʔ 鷹  
**fi<sub>b</sub>** : <sup>-fi</sup>be ja 蛙  
**fi<sub>d</sub>** : <sup>-fi</sup>dɛ: za 配偶者  
**fi<sub>d</sub>** : <sup>-fi</sup>d̄i mɤ 和やかな  
**fi<sub>d</sub>** : <sup>-fi</sup>də ba 重い  
**fi<sub>j</sub>** : <sup>-fi</sup>jo: rə ボタン  
**fi<sub>g</sub>** : <sup>-fi</sup>gō t<sup>h</sup>u ハリネズミ  
**fi<sub>dz</sub>** : <sup>-fi</sup>dzō 町  
**fi<sub>dz</sub>** : <sup>-fi</sup>dze fiã 腸  
**fi<sub>z</sub>** : <sup>-fi</sup>dɤ fi<sub>z</sub>ɤ 石屋  
**fi<sub>z</sub>** : <sup>-fi</sup>pə fi<sub>z</sub>ɛ: 剃る  
**fi<sub>m</sub>** : <sup>-fi</sup>ma za 孔雀  
**fi<sub>n</sub>** : <sup>-fi</sup>naʔ 膿  
**fi<sub>ɲ</sub>** : <sup>-fi</sup>ɲiʔ 目  
**fi<sub>ŋ</sub>** : <sup>-fi</sup>ŋa 太鼓  
**fi<sub>l</sub>** : <sup>-fi</sup>lu: 竹笛  
**fi<sub>j</sub>** : <sup>-fi</sup>jō ʂ<sup>h</sup>a 牛肉

わたり音を含む 2 子音連続

わたり音には/w/および/j/がある。

組み合わせの種類は豊富であるが、多くの組み合わせで見られる語が少ない。

/w/のもの

- t<sup>h</sup>w** : <sup>-t<sup>h</sup></sup>wi tō 罰する  
**t<sup>h</sup>w** : <sup>-t<sup>h</sup></sup>wō mɤ まっすぐな  
**t<sup>h</sup>w** : <sup>-t<sup>h</sup></sup>wɛ: 漏れる  
**k<sup>h</sup>w** : <sup>-k<sup>h</sup></sup>wo 彼  
**kw** : <sup>-h</sup>sa kwa 硬い

- ʂw : ʂwə ra 下  
zʷ : ʰə zʷoʔ 削る  
ʂ<sup>h</sup>w : ʰʂ<sup>h</sup>wəʔ 産む  
ʂw : ʰjɛ ʂwo 貼る  
zʷ : ʰp<sup>h</sup>ə zʷoʔ 揺する  
xw : ʰxwa 花が開く  
hw : ʰtsō hwa 錐  
nw : ʰŋgwo nʷoʔ ʰŋgu: うなずく  
ŋw : ʰɕə ri ʰjō ŋwoʔ ついて行く  
lw : ʰdzī lwō だます  
rw : ʰɕe rʷoʔ 収穫する

/j/のもの

- p<sup>h</sup>j : ʰp<sup>h</sup>je ka 子ぶた  
t<sup>h</sup>j : ʰt<sup>h</sup>ō t<sup>h</sup>jeʔ 松脂  
mj : ʰmje: にせの  
mj : ʰmjē mba 医者  
ŋj : ʰŋjē ʰjʷ 枕

3 子音連続

- <sup>n</sup>t<sup>h</sup>w : ʰ<sup>n</sup>t<sup>h</sup>wə: rə dzaʔ いつか  
ʰk<sup>h</sup> : ʰ<sup>h</sup>lwō ʰk<sup>h</sup>wə: ふいご  
<sup>n</sup>dzw : ʰzī <sup>n</sup>dzwi 賛成する  
ŋgw : ʰŋo ŋgwo 曲がった  
<sup>h</sup>tw : ʰ<sup>h</sup>tʷoʔ ʰto: 参加する  
<sup>h</sup>dw : ʰ<sup>h</sup>dwī ts<sup>h</sup>a 支える  
<sup>h</sup>jw : ʰ<sup>h</sup>jʷoʔ かさが増す  
<sup>h</sup>gw : ʰte ʰgʷoʔ 待つ  
<sup>h</sup>tsw : ʰ<sup>h</sup>tsʷoʔ te 刺す

- h<sub>ɕ</sub>w : ʔp<sup>h</sup>ə<sup>h</sup>ɕwi: 量る  
 ʔ<sub>ɕ</sub>w : ʔ<sup>h</sup>ɕwɪ<sup>h</sup>gē 狩人  
 ʔ<sub>ɕ</sub>w : ʔ<sup>h</sup>ɕwɔ̄ 風  
 ʔ<sub>ɕ</sub>j : ʔce<sup>h</sup>ɕjɔ̄ なめす

### 2.4.3 末子音

Lamdo 方言に認められる末子音には, /ʔ, w, j; wʔ, jʔ/がある。このうち, /ʔ/が大部分の例を占める。末子音は先行する母音との共起制限があり, 特に長母音とは結びつかない。以下に絶対語末および語中に分けて例をあげる。

絶対語末例			語中例	
例語	語義	例語	語義	
ʔ	ʔbuʔ	空気	ʔmuʔ wa	霧
w	ʔp <sup>h</sup> ɔ̄w	茶を入れる	ʔciw k <sup>h</sup> a	春
j	ʔce nēj	押さえる	ʔtaj t <sup>h</sup> ə pɕ	適切である
wʔ	ʔpəwʔ	落ちる	ʔ <sup>h</sup> dzurwʔ rə	衝突する
jʔ	ʔpə <sup>h</sup> sejʔ	殺す		

## 3 Lamdo 方言における蔵文と口語形式の対応関係

蔵文と口語形式の対応関係は, チベット語方言の特徴を分析する伝統的な手法であり, さまざまな先行研究において一定の注目すべき対応関係が示されている。ただし注目すべき点が分析の対象となる方言によって異なってきて, 必ずしも先行研究に扱われる通りの特徴を見るだけでは十分でない。この議論は現代の方言の分析であるものの, 通時的な議論にも通じる。個別方言の分析と方言比較の手法によって, 方言所属を問題にする場合にはかなりの精度の結果を得ることが可能となる。

ここでは, 西 (1986) や西田 (1987), 張濟川 (2009: 259–357) などに提示される特徴を中心に, さらに鈴木 (2008b, 2009a) で示されている迪慶州のチベット語方言で注目される特徴を考慮に入れつつ, Lamdo 方言における現象を整理する。ただし, 声調については蔵文との対応関係の面でなお不透明な部分もあるため, 本稿では扱わない。なお, 蔵文は Wylie 式の転写で示す。チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

### 3.1 初頭子音

#### 3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Lamdo 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、藏文で基字に先行する子音がない有声音字 *g, j, d, b, dz, zh, z* は、基本的にそれぞれの調音位置の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈpɜ 「息子」 ( <i>bu</i> )	ˈʂo wa 「帽子」 ( <i>zhwa</i> )
ˈtõ 「熊」 ( <i>dom</i> )	ˈsẽ 「ごはん」 ( <i>zan</i> )

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈɕa 「鶏」 ( <i>bya</i> )	ˈtʰwɔʔ 「6」 ( <i>drug</i> )
ˈtɕũ 「着る」 ( <i>gyon</i> )	ˈco: pa 「腹」 ( <i>grod pa</i> )

以上の藏文有声音字に先行子音（頭字，前接字）が存在するとき、Lamdo 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようなものである。

ˈd̪ɜ ba 「石」 ( <i>rdo</i> )	ˈd̪za riʔ 「漢族」 ( <i>rgya rigs</i> )
ˈd̪ɔ wa 「蚤」 ( <i>lji ba</i> )	ˈd̪ga: 「愛する」 ( <i>dga'</i> )
ˈz̪u: 「蛇」 ( <i>sbrul</i> )	ˈz̪ɔ 「4」 ( <i>bzhi</i> )

なお、藏文 *dbug*s 「空気」の対応形式も有声閉鎖音が現れ、ˈbuʔ となる。

#### 3.1.2 藏文 *sh, zh* 対応形式

Lamdo 方言では、基本的にそり舌摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈʂʰa 「肉」 ( <i>sha</i> )	ˈz̪ɔ̃ n̪ĩ 「しあさって」 ( <i>gzhis nyin</i> )
ˈʂʰĩ 「しらみ」 ( <i>shig</i> )	ˈʂĩ 「耕地」 ( <i>zhing</i> )

#### 3.1.3 藏文 *c, ch, j* 対応形式

Lamdo 方言では、基本的に前部硬口蓋閉鎖音が対応する。たとえば、以下のようなものである。



鈴木 カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属

ʼeõ k<sup>h</sup>a 「胸」 (*brang kha*)                      ʼzã 「ハエ」 (*sbrang*)  
ʼeũ <sup>n</sup>du 「猿」 (*sprel* ?)                      ʼe<sup>h</sup>oʔ 「略奪する」 (*'phrog*)

ただし、藏文 'br の組み合わせは異なる対応関係を見せる。

ʼje: 「米」 (*'bras*)                                      ʼdoʔ 「龍」 (*'brug*)

Kr 対応形式については、基本的に硬口蓋閉鎖音が対応する。たとえば、以下のようである。

ʼc<sup>h</sup>aʔ 「血」 (*khrag*)                                      ʼi<sup>h</sup>jo: rə 「ボタン」 (*sgro* ?)  
ʼcə 「ナイフ」 (*gri*)                                      ʼi<sup>h</sup>c<sup>h</sup>ə wa 「胆嚢」 (*mkhris pa*)

ただし、中にはそり舌閉鎖音や足字 r が脱落したと考えられる形式と対応関係を見せる例がある。

ʼt<sup>h</sup>ə 「1 万」 (*khri*)                                      ʼgwɣ 「行く」 (*'gro*)  
ʼta ts<sup>h</sup>õ 「寺」 (*grwa tshang*)

tr/dr 対応形式については、dr のみが確認されているが、基本的にそり舌閉鎖音が対応する。たとえば、以下のようである。

ʼt̪e 「思う」 (*dran*)                                      ʼtwəʔ 「6」 (*drug*)

ただし、次のような例外もある。

ʼje: 「滑る」 (*'dred*)

sr 対応形式については、基本的に前気音を伴う歯茎摩擦音<sup>h</sup>s/が対応する。たとえば、以下のようである。

ʼsə<sup>h</sup> səʔ 「薄い」 (*srab srab*)                                      ʼse: ma 「豆」 (*sran ma*)

### 3.1.6 藏文基字 l, y 対応形式

Lamdo 方言では、基本的に藏文 l には/j/が、藏文 y には/z/が対応する。たとえば、以下のようである。

ʼjã 「道」 ( <i>lam</i> )	ʼzi jɣ 「文字」 ( <i>yi ge</i> )
ʼja: ɳgɣ 「手」 ( <i>lag 'go</i> )	ʼzi: wã 「花椒」 ( <i>g.yer ma</i> )
ʼjɣ wã 「葉」 ( <i>lo ma</i> )	ʼzɜ 「ジャスパー」 ( <i>g.yu</i> )

ただし蔵文 y 対応形式には/j/になるものもあり，たとえば動詞の接頭辞に用いられる/ja, je/は蔵文 *yar* 「上」と対応している。

### 3.1.7 蔵文 lh, sl 対応形式

Lamdo 方言では，基本的に硬口蓋摩擦音/ç/が対応する。たとえば，以下のようなものである。

ʼça 「神」 ( <i>lha</i> )	ʼça 「編む」 ( <i>sla</i> )
ʼçøʔ çøʔ 「ゆるい」 ( <i>lhod lhod</i> )	ʼje: çä 「簡単な」 ( <i>las sla</i> )

### 3.1.8 蔵文足字 w 対応形式

Lamdo 方言では，蔵文足字 w に対応すると見られる音形式が，語の第 2 音節に現れる例がある。たとえば，以下のようなものである。

ʼ <sup>h</sup> tsə wa 「草」 ( <i>rtswa</i> )	ʼrə wa 「角 (つの)」 ( <i>rwa</i> )
ʼšo wa 「帽子」 ( <i>zhwa</i> )	

しかし，ʼts<sup>h</sup>a 「塩」 (*tshwa*)，ʼa ts<sup>h</sup>ö 「寺」 (*grwa tshang*) などには/w/を含む第 2 音節が現れない。

### 3.1.9 蔵文 s+鼻音字を含む形式

Lamdo 方言では，蔵文鼻音字に頭字 s を伴う形式には，調音位置の対応する無声鼻音で現れる。たとえば，以下のようなものである。

ʼmë 「葉」 ( <i>sman</i> )	ʼñī 「心臓」 ( <i>snying</i> )
ʼñū mba 「狂人」 ( <i>smyon pa</i> )	ʼṅa 「鼻」 ( <i>sna</i> )

### 3.1.10 前鼻音を含む子音連続

Lamdo 方言の前鼻音を含む子音連続は，前鼻音要素に後続する子音に無声有気音と有声音がある。この口語形式は蔵文との対応関係とうまく一致する点が多い。前鼻音

要素と後続する子音は、調音位置、有声性についてほぼ一致する。たとえば、以下のようである。

ʰgwɣ 「頭」 ( <i>mgo</i> )	ʰkʰi: lɣ 「腎臓」 ( <i>mkhal ba</i> )
ˀdze: pa 「美しい」 ( <i>mdzes pa</i> )	ˀkʰɣ pa 「唇」 ( <i>mchu pa</i> )

ほかにも、鼻音要素を強く発音するタイプの子音連続や、もしくは初頭子音が鼻音だけになってしまったものもある。

ˀnda 「弓」 ( <i>mda</i> )	ˀnõ 「納西族」 ( <i>'jang</i> )
-------------------------	----------------------------

### 3.1.11 そのほかの特徴

Lamdo 方言では、藏文 *m* を初頭子音とする語が前部硬口蓋鼻音 *ŋ* に対応するものがある。たとえば、以下のようである。

ˀŋiʔ 「目」 ( <i>mig</i> )	ˀnə 「～ない (否定辞)」 ( <i>mi</i> )
ˀŋõ 「名前」 ( <i>ming</i> )	ˀŋiʔ 「飲み込む」 ( <i>mid</i> )

これらの中には古藏文において *my* とつづられていた語も含まれており、古藏文の形式に対応関係を求めることもできる。「目」は声調や前気音の現れも考えると、古藏文の *dmyig* と対応するといえる。なお、もともと藏文で *my* を含む *myong* 「～したことがある」は *ˀnõ* に対応する。

## 3.2 母音および母音 + 末子音

基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、藏文再添後字 *s* は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、いくつかの対応形式は不明であるため、空白にしてある。

V\C	#/'	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	əwʔ	eʔ	ɑʔ	ã	ẽ	õ	e:	e:	e:
i	ə	əʔ	iʔ	iʔ	ã	ĩ	ĩ			i:
u	ɜ	owʔ	uʔ	ɔʔ	õ	ẽ	õ	u: / u:	u: / u:	u
e	ə / ɣ	ɣwʔ	e:	ɑʔ			ẽ	e: / e:	u:	i:
o	ɣ		uʔ / eʔ	oʔ	õ	õ	õ	wo	u:	u:

Lamdo 方言では、必ずしも蔵文との対応関係は対一になるとは限らず、上に示したのは 1 つの傾向である。

基本的な傾向として、蔵文で開音節のものは短母音と対応し、末子音が鼻音の場合は鼻母音、閉鎖音の場合は声門閉鎖を伴う短母音、それ以外の末子音の場合は長母音と対応するよう見える。

なお、長鼻母音の例は以上の表に現れないが、蔵文対応形式を考えると、2 音節が縮約したものに对应する。

ˈnã: 「日にち」 ( <i>nyi ma</i> )	ˈpõ: 「娘」 ( <i>bu mo</i> )
ˈpã: 「霜」 ( <i>ba mo</i> )	ˈshõ: 「種」 ( <i>sa bon</i> )

#### 4 Lamdo 方言の方言所属：方言比較を通じて

本節ではチベット語の方言比較を通じて Lamdo 方言の方言所属を探る。冒頭で紹介したように、Lamdo 方言の分布地域は方言区分上複数の方言群に囲まれているため、ここでは複数の方言群の中から以下の 5 種を主な比較対象にする。

1. rGyalthang (大中甸) 方言：Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群
2. Byagzhol (霞若石茸) 方言：Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群
3. mThachu (塔城柯那) 方言：Sems-kyi-nyila 方言群 Melung 下位方言群
4. gTorwarong (東旺普呂) 方言：Chaphreng 方言群 gTorwarong 下位方言群
5. nDappa (稻城金珠) 方言：Muli-nDappa 方言群 gCinggrol 下位方言群

1. から 4. までは迪慶州に分布し、5. は四川省稻城県に分布する。なお、以上の方言分類は Suzuki (2009a) を参照。以下の議論では、上から順に rGy, ByS, mTh, gTP, nDa と略記する。また、それ以外の方言についても適宜必要に応じて言及する。

なお、雲嶺山脈東部下位方言群の全体像については鈴木 (2009b) を、Melung 下位方言群については鈴木、ツェリ・ツォモ (2007) を、Chaphreng 方言群の全体像については鈴木 (2007) を、gTorwarong 方言については Barte (2007) をそれぞれ参照。

## 4.1 蔵文対応形式に関する比較

### 4.1.1 初頭子音

3.1.1 で扱った子音の有声性 (「茶」「帽子」「9」), 3.1.5 のうちの蔵文 sr 対応形式 (「豆」), 3.1.9 で扱った蔵文 s+鼻音字を含む形式 (「薬」「鼻」), 3.1.10 で扱った前鼻音を含む子音連続 (「頭」「食べる」), および 3.1.11 で述べたそのほかの特徴 (「名前」「飲み込む」) に関しては, それぞれの対応関係において, Lamdo 方言は先に示した 5 つの方言すべてと共通するといえる。

語義	蔵文	Lamdo	rGy	ByS	mTh	gTP	nDa
茶	<i>ja</i>	ʼtʂa	ʼtʂa	ʼtʂa	ʼtʂe	ʼtʂa	ʼto:
帽子	<i>zhwa</i>	ʼʂo wa	ʼʂwa:	ʼʂwa	ʼʂə wə	ʼʂu wa	ʼxo
9	<i>dgu</i>	ʼfi gɔ	ʼfi guu	ʼfi guu	ʼfi gu	ʼfi guu	ʼfi guu
豆	<i>sran ma</i>	ʼhse: ma	—	ʼhse: thɪ?	ʼhse: mɛ	ʼhse: mō	ʼsə mō
薬	<i>sman</i>	ʼmɛ̃	ʼmjɛ̃	ʼmjɛ̃	ʼmɪ	ʼmɛ?	ʼmɪ?
鼻	<i>sna</i>	ʼn̄a	ʼn̄ā	ʼn̄a	ʼn̄e	ʼn̄ā	ʼn̄ā
頭	<i>mgo</i>	ʼɳgwɣ	ʼɳgwa	ʼɳgwo	ʼɳgu	ʼɳgu	ʼɳgu
食べる	<i>'chag</i>	ʼtʂʰa:	ʼtʂʰa:	ʼtʂʰa	—	ʼtʂʰa?	ʼtʂʰa?
名前	<i>mɪŋ</i>	ʼn̄ɔ	ʼn̄ɔ:	ʼn̄o:	ʼn̄ɔ	ʼn̄ɔ	ʼn̄i?
飲み込む	<i>mid</i>	ʼni?	—	—	ʼn̄ə:	ʼni?	ʼm̄ə ni?

ただし 3.1.11 の特徴に関して, nDappa 方言では否定辞の *mi* は /m̄ə/ となる。

一方, 3.1.2 で扱った蔵文 sh, zh 対応音 (「肉」「4」「帽子」) および 3.1.8 で扱った蔵文足字 *w* 対応音 (「帽子」「草」) に関しては, nDappa 方言だけが異なる対応関係を見せる。

語義	蔵文	Lamdo	rGy	ByS	mTh	gTP	nDa
肉	<i>sha</i>	ʼʂʰa	ʂʰa	ʂʰa	—	ʂʰa	ʂʰo
4	<i>bzhi</i>	ʼzə	ʂʰzə	ʂʰzə	ʂʰza	ʂʰzə	ʂʰjə
帽子	<i>zhwa</i>	ʼʂo wa	ʼʂwa:	ʼʂwa	ʼʂə wə	ʼʂu wa	ʼxo
草	<i>rtswa</i>	ʼhʂə wa	ʼhʂwa	ʼhʂwa	ʼhʂwə	ʼhʂu wa	ʼhʂo:

さて、破擦音/摩擦音の対応関係に関する点 (3.1.3, 3.1.4, 3.1.5) は、Suzuki (2008a) で詳しく議論されているように、複雑な様相を見せる。迪慶州チベット語の諸方言についても相当な差異が見られるため、以下に詳しく述べる。

語義	藏文	Lamdo	rGy	ByS	mTh	gTP	nDa
水	<i>chu</i>	$\bar{t}^h\text{ɕ}$	$\bar{t}^h\text{ɕ}^h\text{u}$	$\bar{t}^h\text{ɕ}^h\text{u}$	$\bar{t}^h\text{ɕ}^h\text{u}$	$\bar{t}^h\text{ɕ}^h\text{u}$	$\bar{t}^h\text{ɕ}^h\text{u}$
蚤	<i>lji ba</i>	$\bar{f}^i\text{d}\bar{\text{a}}\text{wa}$	—	—	—	$\bar{f}^i\text{dzu wa}$	$\bar{f}^i\text{d}\bar{\text{a}}\text{:}$
鶏	<i>bya</i>	$\acute{\text{c}}\text{a}$	$\acute{\text{c}}\text{a}$	$\acute{\text{c}}\text{a}$	$\hat{\text{c}}\text{e}$	$\acute{\text{s}}\text{a}$	$\acute{\text{c}}\text{a}$
漢族	<i>rgya</i>	$\bar{f}^i\text{dza}$	$\bar{f}^i\text{dza}$	$\bar{dza}$	$\bar{f}^i\text{dze}$	$\bar{z}\text{a}$	$\bar{f}^i\text{dzo}$
髪	<i>skra</i>	$\bar{h}\text{ca}$	$\bar{h}\text{tca}$	$\bar{h}\text{tca}$	$\bar{h}\text{ka}$	$\bar{h}\text{t}\bar{\text{c}}$	$\bar{h}\text{t}\bar{\text{c}}$
ナイフ	<i>gri</i>	$\acute{\text{c}}\bar{\text{a}}$	—	$\acute{\text{t}}\bar{\text{a}}\text{t}\bar{\text{s}}\bar{\text{o}}$	$\acute{\text{k}}\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{t}}\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{t}}\bar{\text{a}}$
書く	<i>bri</i>	$\bar{c}^h\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{c}}\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{t}}\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{p}}\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{t}}\bar{\text{a}}$	$\acute{\text{t}}\bar{\text{a}}$
猿	<i>spre'u</i>	$\bar{c}\bar{\text{u}}^h\text{d}\bar{\text{u}}$	$\bar{?}\text{a}\text{c}\bar{\text{u}}$	$\bar{c}\bar{\text{a}}\text{ma}$	$\bar{h}\text{pur}$	$\bar{h}\text{t}\bar{\text{u}}$	$\bar{t}\bar{\text{e}}$
6	<i>drug</i>	$\bar{t}\bar{\text{w}}\bar{\text{a}}\bar{?}$	$\bar{t}\bar{\text{o}}\bar{?}$	$\bar{t}\bar{\text{s}}\bar{\text{o}}\bar{?}$	$\bar{t}\bar{\text{a}}\bar{?}$	$\bar{t}\bar{\text{o}}\bar{?}$	$\bar{t}\bar{\text{u}}\bar{?}$

「水」が示すように、藏文 c, ch, j 対応形式は、Lamdo 方言と nDappa 方言が一致する。「鶏」「漢族」が示すように、藏文足字 y 対応形式は、Lamdo 方言と gTorwarong 方言以外の方言が一致している。藏文足字 r 対応形式については、dr を含む「6」はすべての方言で変化の方向が一致する一方で、Kr 対応形式は Lamdo 方言が独自の形式を示し、Pr 対応形式は Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群と雲嶺山脈東部下位方言群の複数の語の間で共通する。

ここで他の方言の事例を補うと、藏文 Kr 対応形式については rGyalthang 下位方言群に属する Yangthang (小中甸) 方言において Lamdo 方言と同様に硬口蓋閉鎖音で現れる。また、藏文 c, ch, j 対応形式については gTorwarong 下位方言群に属する Nagskerags (納格拉) 方言において Lamdo 方言と同様に前部硬口蓋閉鎖音で現れる。このように、下位方言区分について複数のまたがって特殊な対応関係が見られる点は興味深い。

ここで、破擦音/摩擦音の対応関係を整理すると、以下のようになる。対応音は調音位置について無声無気の形式で代表させる。

藏文	Lamdo	rGy	ByS	mTh	gTP	nDa
c 類	t	tʂ	tʂ	tʂ	tɕ	t
Ky 類	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ	ɕ/tɕ	tɕ
Py 類	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ
Kr 類	c	tɕ	tɕ	k <sup>+</sup>	t	t
Pr 類	ɕ	ɕ	ɕ	p <sup>+</sup>	t	t
Tr 類	t	t	t	t	t	t

以上の破擦音/摩擦音の対応関係全体を見渡したとき、Lamdo 方言のような対応関係が認められる方言はチベット語全体を見てもまれであり、本来方言区分について最も示唆的な情報を提供する基準において、Lamdo 方言の事例に関しては判断を下すことができない。

次に、Suzuki (2008b) でも取り上げた藏文 l, y, lh, sl 対応音に関する点 (3.1.6, 3.1.7) では、ここで扱う諸方言について明確に二分することができる。

語義	藏文	Lamdo	rGy	ByS	mTh	gTP	nDa
手	<i>lag pa</i>	ʃa: <sup>h</sup> gɣ	ʃaʔ ka	ʃo kwa	ʃa:	ʃa <sup>h</sup> gu	ʃa fio
花椒	<i>g.yer ma</i>	ʔzi: wā	<sup>h</sup> je wā	<sup>h</sup> ju: ma	<sup>h</sup> je: mɛ	<sup>h</sup> ze: wō	ʔzō:
神	<i>lha</i>	ʔça	ʔla	ʔla	ʔle	ʔle	ʔlo
教える	<i>slob</i>	ʔçəʔ	<sup>h</sup> ljoʔ	<sup>h</sup> lɔ:	<sup>h</sup> loʔ	<sup>h</sup> ləwʔ	ʔlɣʔ

まず藏文 l 対応音に注目すると、/l/で対応する方言と /j/で対応する方言に分かれる。Lamdo 方言は後者の対応を見せるが、これと同様の対応関係を見せる方言は nDappa 方言と gTorwarong 方言で、Sems-kyi-nyila 方言群の方言は基本的にすべて前者の対応を見せる。藏文 y 対応音に注目すると、Lamdo 方言は nDappa 方言とのみ一致する。ただし、藏文 lh, sl 対応音に関しては、上に語形式を対照した方言の中では Lamdo 方言に一致する方言がない。

藏文 lh, sl 対応音に関しては、Lamdo 方言の対応関係は Chaphreng 方言群 Chaphreng 下位方言群の一部の例と共通するほか、sDerong-nJol 方言群の多くの方言とも共通する (鈴木 2009b)。たとえば、Chaphreng 下位方言群に属する Sagong 方言では ʔçə 「神」、sDerong-nJol 方言群に属する Yungling 方言では ʔça 「神」や ʔç<sup>h</sup>əʔ 「教える」のようである。

藏文 l, y, lh, sl 対応音全てを考慮すると、Lamdo 方言の対応関係は sDerong-nJol 方言群に主流の対応関係を示していることとなり、同方言の近隣に分布するいずれの方言

とも異なる特徴を示していることになる。

#### 4.1.2 母音 + 末子音

母音 + 末子音の音対応の特徴については、初頭子音の場合と比較して、示すことが相対的に困難である。本節で扱う諸方言の場合、藏文で開音節となる場合に若干の特徴が見られるほか、迪慶州チベット語に特徴的な藏文 *im* 対応形式を検討することが問題になるだろう。以下にこれらの具体的な例を示す。

語義	藏文	Lamdo	rGy	ByS	mTh	gTP	nDa
土	<i>sa</i>	ˉs <sup>h</sup> a	ˉs <sup>h</sup> a	ˉs <sup>h</sup> a	ˉs <sup>h</sup> e	˘s <sup>h</sup> ɑ	˘s <sup>h</sup> o
水	<i>chu</i>	ˉt <sup>h</sup> ʒ	ˉt <sup>h</sup> ʂu	ˉt <sup>h</sup> ʂu	ˉt <sup>h</sup> ʂu	ˉt <sup>h</sup> ʂu	˘t <sup>h</sup> u
齒	<i>so</i>	ˉs <sup>h</sup> ʂ	ˉs <sup>h</sup> wə	ˉs <sup>h</sup> wo	ˉs <sup>h</sup> u	˘s <sup>h</sup> u	ˉs <sup>h</sup> u
おいしい	<i>zhim po</i>	˘ʂə mʂ	˘ʂō nə	˘ʂə: nə	˘ʂē	˘ʂō mɔ	˘ʂu mu

「土」が示すように、Lamdo 方言は Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言と近似する。「水」「齒」は Lamdo 方言が独自の対応関係を示している。「おいしい」は gTorwarong 方言と比較的近いように見える。これらを見ると、母音 + 末子音の対応関係から特定の方言との類似を示すことは難しいことが言える。

付け加える点として、藏文 *o#* 対応形式は sDerong-nJol 下位方言群のいくつかの方言と一致するということがあるが、それでもなお方言所属の議論には大きく関与しないだろう。

#### 4.1.3 比較の結果

以上に述べた点を総合的に考えると、Lamdo 方言は複数の方言群の特徴を共有していることが分かる。ここで Lamdo 方言と対照した方言の間に差異が見られるものを整理すると、次のようになる。

Lamdo 方言と nDappa 方言以外の方言が一致：藏文 *sh, zh*, 足字 *w* 対応形式

Lamdo 方言と gTorwarong 方言以外の方言が一致：藏文 *Py, Ky* 対応形式

Lamdo 方言と nDappa 方言のみが一致：藏文 *c, ch, j, l, y* 対応形式

Lamdo 方言と rGyalhang 下位方言群とが一致：藏文 *Pr* 対応形式

Lamdo 方言に独自の形式：藏文 *Kr* 対応形式、藏文母音 *u#, o#* 対応形式

これを見る限り、蔵文との対応形式は異なる方言群にわたってそれぞれ部分的に一致することから、実際のところ方言区分の決定にはあまり有効ではないし、このような事例はチベット語方言を見渡してもあまり見かけない。Lamdo 方言は地理的条件を考慮した音声に関する方言比較が成立しないような 1 つの例になる。

しかし個々の音変化は決して Lamdo 方言だけに見られる特徴ではない。たとえば蔵文 Kr 対応形式が硬口蓋閉鎖音となるのは Yangthang 方言や Nagskerags 方言などと共通する。たとえば rGyalthang 方言の場合はこれが前部硬口蓋破擦音と対応し蔵文 Ky 対応形式と合流しているけれども、合流の前段階において硬口蓋閉鎖音が存在したと仮定するのは、Yangthang 方言の事例を参照して、無理のないものと考えることができる。現に Lamdo 方言の蔵文 Pr 対応形式は rGyalthang 方言と同様に前部硬口蓋摩擦音である。これとの並行性を考えると、蔵文 Ky 対応形式は硬口蓋摩擦音であってもよいはずであるけれども、Lamdo 方言には /ç/ という硬口蓋摩擦音が認められるのに、実際はそうではないから、硬口蓋音の前部硬口蓋音化というのは十分仮説として成立しうると考えられる。

この仮説は Lamdo 方言が rGyalthang 方言に系統的に近いような印象を強くするけれども、依然として蔵文 c, ch, j, l, y 対応形式は nDappa 方言と並行的であるから、やはり複数の方言群の特徴を兼ね備えている点から見て、どちらの方言群に系統的に近いのかを音対応の観点のみから決定することはできない。

## 4.2 語彙項目に関する対照

次に、語彙項目について、蔵文と必ずしも一致しないものを含み方言に差異が現れるものを例に、Lamdo 方言の方言所属を議論する。その際、上の議論で用いた方言から rGyalthang 方言 (rGy), Byagzhol 方言 (ByS), gTorwarong 方言 (gTP), nDappa 方言 (nDa) を選んで考察する。必要に応じて他の方言についても言及する。

なお、現段階で Lamdo 方言に全く独自のものや明らかな漢語からの借用語は扱わない。

### 4.2.1 蔵文と対応関係が認められる中での形式

まず、蔵文との対応関係が特徴的だと判断できる形式の例を掲げる。参考として、一般的な蔵文形式を添える。

語義	Lamdo	rGy	ByS	gTP	nDa	藏文
うさぎ	ʼrə gō	ʼrə gō	ˉpu: jaʔ	ˉ <sup>h</sup> pō zaʔ	ʼrə γṣ̃	<i>ri bong</i>
からす	ʼcə roʔ	ˉcə ruʔ	ʼce ruʔ	ʼsa ruʔ	ʼp <sup>h</sup> u ruʔ	<i>bya rog</i>
月	ʼjɛ gɛ:	ˉ <sup>n</sup> da wa	ˉ <sup>n</sup> lə ga:	ˉ <sup>n</sup> la gɛ	ˉ <sup>n</sup> da fio	<i>zla dkar</i>
犬	ˉ <sup>h</sup> tsə	ˉ <sup>h</sup> tsə	ˉ <sup>h</sup> tsə	ˉ <sup>h</sup> tsə	ˉ <sup>h</sup> tsə	<i>khyi</i>
行く	ˉ <sup>n</sup> gwɣ	ˉ <sup>n</sup> gwə	ʼŋə / ʼŋgə	ˉ <sup>n</sup> dɬu	ˉ <sup>n</sup> dɬu	<i>ʼgro</i>
人	ʼnə	ʼnə	ʼnə	ʼnə	ʼnə	<i>mi</i>
米	ˉ <sup>n</sup> je:	ˉ <sup>n</sup> gɯ:	ʼti ma	ˉ <sup>n</sup> dɛ:	ˉ <sup>n</sup> dɑ:	<i>ʼbras</i>
1	ˉ <sup>h</sup> tɕiʔ	ˉ <sup>h</sup> tɕiʔ	ˉ <sup>h</sup> tɕiʔ	ˉ <sup>h</sup> tɕiʔ	ˉ <sup>h</sup> tɕiʔ	<i>gcig</i>
2	ˉ <sup>n</sup> ə	ˉ <sup>h</sup> i <sup>n</sup> əj	ˉ <sup>n</sup> i:	ˉ <sup>h</sup> i <sup>n</sup> u	ˉ <sup>h</sup> i <sup>n</sup> ə	<i>gnyis</i>

「うさぎ」は藏文 *ri bong* および *spang g.yag* (直訳は草原のヤク) に対応する形式のどちらかを用いていると考えられる。後者は特に迪慶州のチベット語方言で一般的に見られるが、rGyalthang 方言をはじめ、同州の東部で話される方言では前者を用いるものが多く、またこれは nDappa 方言でも用いられていることが分かる。

「からす」は nDappa 方言以外藏文 *bya rog* に対応する形式を用いている。

「月」は Lamdo 方言の形式が藏文 *zla dkar* と対応し、Byagzhol 方言や gTorwarong 方言の形式と一致する。

「犬」は規則的な藏文 *khyi* 対応形式ではないが、迪慶州のチベット語方言の多くが歯茎破擦音として現れる。gTorwarong 方言や nDappa 方言とは音対応の面で異にし、Sems-kyi-nyila 方言群の特徴を示している。

「行く」は藏文 *ʼgro* から *r* が脱落した形式に対応する。この対応関係は Lamdo 方言では規則的と言えないが、Sems-kyi-nyila 方言群の特徴を共有しているといえる。

「人」は基本的に Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言と共通の形式を見せる。詳細は Suzuki (2009b:271) を参照。

「米」の形式は rGyalthang 方言に近いといえる。rGyalthang 方言ではこの形式を例外として扱うことになるが、Lamdo 方言では一種の藏文 Pr 対応形式と考えることができる点で、rGyalthang 方言の古形における音対応と考えられる可能性が出てくる。

「1」は Lamdo 方言では藏文 *c, ch, j* 対応形式として例外的である点に注目できる。これは gTorwarong 方言以外の方言でも同じ状況にあり、Sems-kyi-nyila 方言群ではこの藏文対応形式は通例そり舌破擦音となり、nDappa 方言では前部硬口蓋閉鎖音になる。例外的な音対応を示す点で共通性があるといえる。

「2」の形式は Byagzhol 方言と同様歯茎鼻音で実現される点で蔵文と異なっているが、この対応関係は雲嶺山脈東部下位方言群や sDerong-nJol 方言群の諸方言でも多く見られ、特段奇異な事例ではない (Suzuki 2009b:274-276)。

#### 4.2.2 蔵文と対応しない形式

次に、蔵文との対応関係が不明なもので、他方言と関連が得られるいくつかの語を掲げる。

語義	Lamdo	rGy	ByS	gTP	nDa
ヤク	ʼɕʰɔʔ	ˉco ta	—	ˉ <sup>h</sup> zaʔ	ˉzaʔ
子ぶた	ʼpʰje ka	ʼpʰje	ˆpʰje ka	ʼpʰu fiu	—
もの	ˉce pa	ˉce wa	ˉtʂə laʔ	ˉse pa	ˉtca zī
猫	ˉʔa lɟə	ˉʔa lɟu	ˉlu lu	ˉʔa lu	ˉfiu liʔ
兄	ˉʔə ja:	ˉja:	ˉʔa wo	ˉʔa ju	ˉpe: zoʔ
姉	ˉʔə zi:	ˉʔa tce	ˉʔa zə	ˉʔa zi	ˉnī <sup>m</sup> bu
花	ˉmɤ roʔ	ˉ <sup>m</sup> bə daʔ	ˉmə tuʔ	ˉ <sup>m</sup> be ruʔ	ˉme roʔ

「ヤク」の Lamdo 方言の形式は rGyalthang 方言の形式の第 1 音節に相当すると考えられるが、確定的ではない。いずれにせよ、この形式は来源不明である。

「子ぶた」の Lamdo 方言の形式は rGyalthang 方言と一部の雲嶺山脈東部下位方言群の方言に共通する形式を含んでいる点に注目できる。

「もの」の Lamdo 方言の形式は、音形式に差はあるが迪慶州のチベット語方言全般に見られるものといえる。nDappa 方言と語形式を異にする点に注目できる。

「猫」の Lamdo 方言の形式は rGyalthang 方言や gTorwarong 方言と同一の要素からなる語である。

「兄」の Lamdo 方言の形式は rGyalthang 方言と同じ系統の語を用いているといえる。そもそも方言差異が激しい語であるが、nDappa 方言と語形式を異にする点に注目できる。

「姉」の Lamdo 方言の形式は Byagzhol 方言や gTorwarong 方言と共通する語である。「兄」と同様に方言差異が激しい語であるが、nDappa 方言と語形式を異にする点に注目できる。

「花」の Lamdo 方言の形式は gTorwarong 方言や nDappa 方言と共通するものが見られ、それは Chaphreng 方言群や sDerong-nJol 方言群 sDerong 下位方言群および sPomtserag 下位方言群 (鈴木 2009e) の形式とも共通する。

#### 4.2.3 対照の結果

以上の語彙項目の対照から、Lamdo 方言は蔵文対応形式と同様、複数の方言群にまたがる方言の特徴をそれぞれ有していることが明らかになった。しかし、語彙の共通性の度合いは、方言群それぞれで異なるということもいえる。

語彙形式を共有するのが多い方言としては、Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言である。rGyalthang 方言と Byagzhol 方言の語彙形式との共通性は、それ以外の方言と比べ、多いことが言える。これに比べて Chaphreng 方言群に属する gTorwarong 方言と Muli-nDappa 方言群に属する nDappa 方言は、共有する語彙形式が相対的に少ない。特に Muli-nDappa 方言群は Lamdo 方言の分布地域に最も近い地点で話されるチベット語方言を含んでいるが、nDappa 方言は Lamdo 方言の話されている地域から距離的には離れた地点で話されていて、Lamdo 方言の分布地域と直接的に接していないけれども、語彙の面で考えるならば、Lamdo 方言の分布地域に接する地域で話されている同方言群の gTongnyi 下位方言群の方言と共通性が見られるという点から考えて、Lamdo 方言と sTongnyi 下位方言群の方言には一定の隔たりがあると考えられる。

語彙形式の対照に選定した語彙は基本的に基礎語彙に属する性質のもので、かつある程度蔵文との対応関係において異質であると判断される形式であるから、蔵文の読書音などによる語彙形式への影響は低く見積もられ、また言及した方言間に共通の威信方言といった存在も認められないため、基礎語彙の性格をもつ語の多くを共有している場合に、それらが借用関係にあると考えるのは難しい。Lamdo 方言のように飛び地に分布する方言が、ある特定の方言群に見られる特徴的な語彙項目を共有している場合、これらの方言が互いに近縁である可能性が高いと判断することには十分妥当性があると考えられる。従って、Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言に見られる語彙形式の共有は、Lamdo 方言の Sems-kyi-nyila 方言群との系統的つながりを示唆すると見ることができる。ただし、同方言群の下位方言区分においてどのような位置を占めるかは、ここで扱った範囲では定まらないといえる。

#### 4.3 結論：Lamdo 方言の系統

本節では、蔵文対応形式の比較と語彙形式の対照を通して、Lamdo 方言の方言所属を議論した。両者のいずれにおいても、Lamdo 方言が複数の方言群にまたがる特徴を有していることが明らかになった。その中で語彙形式の共通性について、Lamdo 方言と Sems-kyi-nyila 方言群との間において基礎的にかつ方言特徴を含む語彙が複数認められる点に注目し、系統的な関連性を認めることができたとした。

この視点に立って再度蔵文対応形式について考えると、確かに Lamdo 方言と Sems-kyi-nyila 方言群の rGyalthang 下位方言群の方言とは少なくない点で共通性が見られる。蔵文 Ky, Py, Pr 対応形式においてこの両者は基本的に同様の対応関係が見られるが、蔵文 c, ch, j, Kr 対応形式が異なっている。このうち蔵文 Kr 対応形式は rGyalthang 下位方言群 Yangthang 方言などに Lamdo 方言と同様の硬口蓋閉鎖音という対応関係が見られ、これが rGyalthang 方言の蔵文 Kr 対応形式である前部硬口蓋破擦音の前段階であると仮定できるということはすでに触れた。そうすると、蔵文 c, ch, j 対応形式が前部硬口蓋閉鎖音になっている点が Lamdo 方言に独自の音変化であるといえる。そしてこれが nDappa 方言と共通する特徴である点が問題を複雑にしているのであるが、これと同様の対応関係は Chaphreng 方言群に属する Nagskerags 方言にも見られ、散発的に異なる方言群に属するいくつかの方言で見られることがいえる。実際のところ、このような音対応は Muli-nDappa 方言群においても nDappa 下位方言群に特徴的である。このため、1つの下位方言群に蔵文 c, ch, j 対応形式について異種の対応関係が見出されても、それを根拠として異なる方言群に分類するということはない。同様のことは、蔵文 l, y 対応形式についてもいえる。sDerong-nJol 方言群の雲嶺山脈西部下位方言群では、同一の下位方言群に蔵文 l, y 対応形式の異なる方言が分類されており、それ以外の蔵文との対応関係や語彙の特徴がきわめて近い対応関係を示すことが1つの下位区分に属する根拠になっている（鈴木 2008a, 2010b）。

以上、蔵文の対応関係の面で、Lamdo 方言の複数の特徴が Sems-kyi-nyila 方言群に属するものであることを示唆するものとなる。これらのことから、Lamdo 方言を Sems-kyi-nyila 方言群に位置づけることが妥当であると考えられる。一方、現段階では下位方言群に関する分類にまでは確言できない。多くの特徴的な点が存在することを踏まえ、独立した下位方言群を暫定的に設定しておきたい。

## 5 まとめ

本稿では、ほぼ未記述であるカムチベット語 Lamdo 方言について、まず音声分析を行って音体系を概観し、次に蔵文と対照することを通じて同方言の音対応の特徴を明らかにした。これによって、Lamdo 方言が閉鎖音、摩擦音、鼻音について前部軟口蓋音と軟口蓋音の対立が認められるといった類型的にまれな特徴を有していることが分かり、その来源も蔵文との一定の対応関係があることが明らかになった。

その結果を受けて、藏文との対応関係と語彙特徴について、Lamdo 方言を取り巻く地域に分布するチベット語方言との比較を行った。その結果、Lamdo 方言は確かに独自の音対応を示すけれども、Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言の特徴に近い特徴を複数の点でもっていることが明らかとなった。また、Lamdo 方言に見られる特徴的な語彙項目についても同様に周辺のチベット語方言との対照を行い、近似的な語彙形式が Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言の中に多く見出せることが分かった。

この結果、筆者は Lamdo 方言を Sems-kyi-nyila 方言群に位置づけることが妥当であるという結論を提示した。そして現段階では独立した下位方言群を設定し、そこに分類しておくことにした。冒頭に示した方言分類について、Sems-kyi-nyila 方言群は以下のように改められる。

方言区分	下位方言区分	所属方言例（迪慶州に限る）
Sems-kyi-nyila	rGyalthang	rGyalthang, Yangthang
香格里拉	雲嶺山脈東部	Nyishe, Thoteng, Byagzhol, Qidzong
	Melung	Melung, mThachu, Zhollam
	Lamdo	Lamdo [浪都]

## 付 記

浪都村における調査は、友人であるケズン・ラモ [sKal-bzang Lha-mo] さんの手配によって実現した。また、Lamdo 方言の調査協力者として主にツェリン・ピンツォ [Tshe-ring Phun-tshogs] さんとロゾン・ドマ [Blo-bzang sGrol-ma] さんの協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 21251007)

## 文 献

- Bartee, Ellen Lynn  
2007 *A Grammar of Dongwang Tibetan*, doctoral dissertation, University of California, Santa Barbara.
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can]  
2002 『藏語方言概論』北京：民族出版社。  
2004 『實用藏文文法教程 [修訂本]』成都：四川民族出版社。
- 西義郎  
1986 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11(4): 837-900; 1 地図。  
西田龍雄  
1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』pp. 108-169, 東京：冬樹社。  
2000 『東アジア諸言語の研究 I：巨大言語群—シナ・チベット語族の展望』京都：京都大学学術出版会。
- 瞿霽堂 [Qu, Aitang]・金效静 [Jin, Xiaojing]  
1981 「藏語方言的研究方法」『西南民族學院學報』第 3 期 76-74。
- 鈴木博之  
2005 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』69: 1-23。  
2007 「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』36: 17-26。  
2008a 「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』37: 115-124。  
2008b 「迪慶藏語是康巴藏語中的“一個”次方言嗎」『康定民族師範高等專科學校學報』第 3 期 6-10。  
2009a 「迪慶州カムチベット語の方言比較—方言の下位区分をめぐる」『平成 16-20 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (S)]「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシユン語の解説」(研究代表者：長野泰彦) 研究成果報告書』Vol. 3, 1-13。  
2009b 「迪慶州金沙江流域カムチベット語（奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言）の方言特徴」『ニダバ』38: 29-38。  
2009c 「川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類」『漢藏語學報』第 3 期 17-29。  
2009d 「納西文化圏のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』34(1): 167-189。  
2009e 「カムチベット語奔子欄 [sPomtserag] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』4: 219-258。  
2010a 「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』2: 107-113。  
2010b 「カムチベット語燕門/斯嘎 [Yanmen/Sakar] 方言の方言特徴」『ニダバ』39: 78-87。
- Suzuki, Hiroyuki  
2008a *Development of the affricate series in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 14th HLS (Göteborg).  
2008b */l/ - /j/ interchange in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 41st ICSTLL (London).  
2009a Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography: a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan. *Linguistic Substratum in Tibet: New Perspective towards Historical Methodology, 2004-2008 Grant-in-Aid for Scientific Research S Final Research Report (Principal Investigator: Yasuhiko Nagano)* Vol.3, 15-34, National Museum of Ethnology.  
2009b Preliminary report on the linguistic geography for multicoloured Tibetan dialects of Yunnan. In Makoto Minegishi et al. (eds.) *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium*, pp. 267-279, Tokyo : Global COE Program 'Corpus-based Linguistics and Language Education', Tokyo University of Foreign Studies.

- 鈴木博之, ツェリ・ツォモ [Tshe-ring mTsho-mo]  
2007 「カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴」『京都大学言語学研究』26: 93–101。
- 吳光范 [Wu, Guangfan]  
2009 『迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索』昆明：雲南人民出版社。
- 張濟川 [Zhang, Jichuan]  
1993 「藏語方言分類管見」戴慶廈等編『民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集』pp. 297–309. 北京：中央民族學院出版社。  
2009 『藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯』北京：社會科學文獻出版社。
- Zhang, Jichuan  
1996 A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25(1): 115–133.
- 朱曉農 [Zhu, Xiaonong]  
2007 「說鼻音」『語言研究』第 3 期 1–13。  
2010 『語音學』北京：商務印書館。